

専門医1

インプラント支持を利用した部分床義歯を用いて咬合再構成
を行った一症例

中谷早希

大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能再建学講座クラウンブリッジ補綴学分野

Full-Mouth Oral Rehabilitation with Implant-assisted Removable Partial Denture: A case report

Nakatani H

Department of Fixed Prosthodontics, Osaka University Graduate School of Dentistry

I. 緒言

従来のパーシャルデンチャー (RPD) と比較し、少数本のインプラントを埋入することにより、長期的に良好な予後に寄与することが期待できるインプラント支持を利用した部分床義歯 (IARPD) は有効な欠損補綴治療手段である。今回、臼歯の咬合支持の喪失による咀嚼障害に対して、IARPDを含む咬合再構成を行い良好な経過を得たので報告する。

II. 症例の概要

患者は70歳の女性で、2015年2月に入れ歯でうまく食事が出来ないことを主訴として来院した。欠損部位は、上顎は6 5|3 4 6 7であり、下顎は7 6 5 4|4 5 6であった。また、7 8は残根で根面板が装着されていた。術前検査より、上下顎義歯不適合による咀嚼障害と診断した。

III. 治療内容

歯周基本治療と並行してプロビビジョナルレストレーションおよび治療用義歯を用いて咬合挙上した。機能的に問題がないことを確認した後に、7|にインプラント埋入を行った。その後上顎は歯冠補綴とRPDで、下顎は歯冠補綴とIARPDで最終補綴を行った。

IV. 経過ならびに考察

義歯装着後リコールを定期的に行っているが、良好に経過している。IARPDを利用することで、咀嚼障害を改善しただけでなく、欠損歯列を改変出来ることが良好な結果につながっていると考えられる。

(発表に際して患者・被験者の同意を得た。)

専門医2

上顎前歯部および上顎左側第一小臼歯欠損に審美的補綴処置を行った一症例

原木真吾

大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能再建学講座クラウンブリッジ補綴学分野

Esthetic prosthetic treatment of the maxillary front teeth and deficit of the left first premolar: A Case Report

Haraki S

Department of Fixed Prosthodontics, Osaka University Graduate School of Dentistry

I. 緒言

上顎左側の一歯欠損および上顎前歯部の審美的改善希望に対して、補綴歯科治療で改善を図ったところ、良好な結果が得られたので報告する。

II. 症例の概要

患者は40歳の女性。|4欠損による咀嚼障害と、上顎前歯の外観不良を主訴に来院された。|4は根管内に穿孔があり予後不良のため、すでに抜歯されていた。上顎前歯は|11を除いて失活歯であったが、補綴処置はされていなかった。患者と相談の上、治療方法は全部被覆冠および固定性ブリッジを選択した。

III. 治療内容

③④⑤には、早期にオベイト型ポンティックの暫間補綴装置を装着し、ついで3|2|2|3にファイバーレ

ジンコアを装着、|11は局所麻酔下で形成し、暫間補綴装置を装着した。その後に暫間補綴装置の調整を重ねて、審美性、機能的性、清掃性の確認を行った後、最終補綴装置を作製・装着した。審美面および機能面に関して、患者の高い満足が得られた。

IV. 経過ならびに考察

術後3年以上経過したが、口腔内所見およびX線写真所見に変化を認めず、良好な状態が維持されている。最終補綴装置の製作にあたって暫間補綴装置による十分な評価が行われたこと、術後も良好な口腔衛生が維持できていることが本結果につながったと考えられる。

(発表に際して患者・被験者の同意を得た。)

専門医3

すれ違い咬合に対して上下顎部分床義歯を用いて咀嚼機能の改善を図った症例

西村朋子

九州大学大学院歯学研究院口腔機能修復学講座インプラント・義歯補綴学分野

A case of the improvement of masticatory function using maxillary and mandibular partial dentures for non-vertical stop occlusion

Nishimura T

Section of Implant and Rehabilitative Dentistry, Faculty of Dental Science, Kyushu University

I. 緒言

すれ違い咬合は対合天然歯の咬合力を欠損部顎堤で受圧するため、部分床義歯装着後に良好な状態を長期的に維持するのは容易ではない。今回すれ違い咬合に対し、部分床義歯を作製して咀嚼機能を図った症例を経験したので報告する。

II. 症例の概要

患者は79歳男性。上顎前歯部の動揺、咀嚼時の疼痛を主訴に当科初診。現存歯の動揺や下顎顎堤粘膜の疼痛のため、使用中の上下顎部分床義歯では咀嚼困難であった。重度歯周炎のため21126を抜歯後、すれ違い咬合(Eichner分類C1, 症型分類level IV)となった。

III. 治療内容

上顎義歯は、支持・維持・把持効果を期待し、現存歯の全てを支台装置とした。また、前歯部の突き上げを減少するため、被蓋関係の是正を行った。加えて、強い咬合力と嘔吐反射があったため、上顎の新義歯口蓋部形態は馬蹄形の金属床義歯とした。2017年12月、76543211236, 76|4567欠損に部分床義歯を装着した。

IV. 経過ならびに考察

現在補綴治療終了後、3年以上経過しているが、現存歯および補綴装置は機能している。本症例では、適切な補綴前処置や義歯設計をしたこと、金属床義歯として強度と剛性を高めたことが長期の良好な経過に繋がっていると考えられる。

(発表に際して患者・被験者の同意を得た。)

専門医4

前歯部固定性補綴装置によりアンテリアガイダンスを獲得し 審美・機能回復を行った一例

河村篤志

新潟大学医歯学総合病院顎口腔インプラント治療部

A case report of esthetic and occlusal rehabilitation for restoring anterior guidance with fixed prosthesis.

Kawamura A

Temporomandibular Joint and Oral Implant Clinic, Niigata University Medical and Dental Hospital

I. 緒言

咬頭嵌合位における臼歯部咬合支持, 側方運動時の前歯部滑走による臼歯部離開は咬合機能を長期間維持する上で欠かすことができない。今回, アンテリアガイダンス喪失によって臼歯部咬合性外傷が認められた症例に対し, 智歯移植による臼歯部咬合支持と前歯部固定性補綴装置による適切なアンテリアガイダンスの回復を行った症例について報告する。

II. 症例の概要

患者は40歳の女性で, 顎の痛みを主訴に来院した。咬筋に圧痛を認め, また前医で製作した上顎前歯部ブリッジは咬合接触しておらず, 右下第一大臼歯に歯根破折が認められた。咀嚼筋痛障害および臼歯部咬合性外傷を伴う咀嚼・審美障害と診断した。

III. 治療内容

上顎スタビリゼーションスプリントの装着によって咀嚼筋痛の安静を図った後, 予後不良歯の抜去と上顎智歯の移植によって臼歯部咬合支持を確保した。プロビジョナルレストレーションを用いて咬合平面の修正とアンテリアガイダンスを決定し, カスタムインサイザルテーブルを用いて最終補綴装置に反映させ, オールセラミックブリッジを装着した。

IV. 経過ならびに考察

夜間はナイトガードを装着し, 定期的なメンテナンスを実施している。最終補綴装着から4年経過しているが, 機能的にも審美的にも患者の満足が得られており, 経過良好である。

(発表に際して患者・被験者の同意を得た。)

専門医5

デジタル技術を応用しインプラント補綴を行った1症例

徳江 藍

鶴見大学歯学部有床義歯補綴学講座

A case report of functional rehabilitation using implant prostheses fabricated by digital technology

Tokue A

Department of Removable Prosthodontics, Tsurumi University School of Dental Medicine

I. 緒言

今回、長期予後が期待できない歯を抜去、インプラント補綴を行い良好な結果を得たので報告する。

II. 症例の概要

63歳、男性。2014年2月咀嚼困難を主訴に来院。上顎は残根のみ、下顎は臼歯残根が認められた。患者は全部床義歯に対して不快感があり、長期使用は困難と訴え、口蓋を被覆しない補綴装置で、かつ咀嚼機能の向上を強く希望したため、インプラント支台による上顎可撤性、下顎固定性補綴を選択した。

III. 治療内容

予後不良な残根を抜歯後、診断用義歯を兼ねた暫間義歯を装着した。上顎骨と義歯をCT撮影し、サージカルガイドを製作し、上顎にはインプラント6本を埋入した。下顎もステントを使用し、インプラントを右側に

4本、左側に2本埋入した。通法に従い、印象採得、咬合採得、およびろう義歯の試適を行い、作業用模型とろう義歯をスキャンし、3次元形状データを記録した。CADによりデンチャースペース内にバーとフレームワークの設計を行い、4つのロケータアタッチメントを設置した純チタン製のリングバーとフレームワークを製作した。上顎インプラントオーバーデンチャーと下顎プロビジョナルレストレーションを同日に装着し、咬合平面を設定した。3ヶ月間の経過観察を経て、顎位に問題がないことを確認した後、下顎をジルコニアクラウンに置換して完成させた。

IV. 経過ならびに考察

装着後約3年経過するが、インプラント、義歯ともに異常は認められず、十分な患者満足を得ている。

(発表に際して患者・被験者の同意を得た。)